

も、声が小さいと一人ずつ大きな声が出るまで怒られたことが何度もありました。数え切れないほどの先輩からの声。そんなとき、いつも添えられていたのは「二年生は先輩に伝える。一年生は分からないことがあったら聞く。それを放っておくということは、チームの成長を捨ててしまうってことなのよ。」という言葉でした。

たくさん叱られ、本当に怖かった先輩。ですが、そのおかげで今、チームに足りないのは何か、必要なことは何なのか分かります。それなのに、私は初めから教えることをせず、変わらないとあきらめてしまっていたのです。顧問の先生の一言で、それまでこもっていた自分だけの世界を打ち破りチーム全体を考える視点が得られたような気がしました。

翌日、私は二、三年生を集め、「一年生のために、もっと厳しく注意していこう。」とかつて先輩がそうであったように、強い心で呼びかけました。それからは私自身やチームメイトの声が体育館中に響きわたっています。「大きい声出して！自分たちも練習しているときに声を出してもらったら嬉しいやろ。」

「ボール拾いは素早く走って。転がったボールに気づかない人が踏

んだら危ないから。」初めは「はい！」という返事の声も聞こえませんでした。先輩のことを思い出して何度も何度もこれからのチームのために声をかけ続けました。今では二、三年生が一丸となつて一年生を引っ張る姿が練習のあたり前の風景になっています。すると、一年生から徐々に声が出てきました。それだけでなく、自然と靴や鞆を揃えるなど、チームを良くしようという雰囲気から一年生から生まれるようになったのです。後に練習の成果や課題を書くクラブノートに「先輩の言葉を忘れないで実践する！私達もチームを支える一員！」と一年生が毎日書いてくれていたことを知りました。

先輩は日に日に逞しく成長しています。そんな姿を見るのが本当に嬉しい。こんな風に思える私自身が、最も変わったのかもしれない。それまでの受け身の弱い心を捨て、強い心を持って自分自身が行動することで、ようやく本当の先輩になれた気がしました。

人は楽なほうに逃げてしまいがちです。厳しい指摘によって摩擦が生じ、衝突することだってあります。ですが、そこから逃げ、恐れていては成長はありません。真摯な気持ちがあるからこそ、勇気

と思いをやりを持って伝えることが必要なのだと思います。怖い先輩の一声一声はチームへの叱咤激励、「もっと成長しよう」とみんなを鼓舞する声だったのです。それが今、分かったような気がします。

残り少ない時期になりましたが、私はクラブの伝統を引き継ぎ、最後までチームをリードしていきます。「とびっきり厳しくて怖い先輩」として。



▲森教育長から表彰状を受け取る桐さん

